

# 第41回平和のための京都の戦争展 展示企画報告

おーい!日本兵士諸君聞こえるか! — 中国での日本人の反戦活動 —

清水 郁子

立命館大学国際平和ミュージアム職員

本報告は、日本中国友好協会京都府連合会が立命館大学国際平和ミュージアムの協力を得て、第41回平和のための京都の戦争展で開催した展示企画「おーい!日本兵士諸君聞こえるか! — 中国での日本人の反戦活動 —」の実践記録をまとめたものです。展示企画の準備にあたっては京都府連合会の中に「戦争展実行委員会」を立ち上げ、4回の準備会を開催しました。本報告で紹介する内容は実行委員会メンバーが分担して準備を行ったものを筆者の責任において加筆・修正を加えたものです。

## 1. 展示企画の趣旨

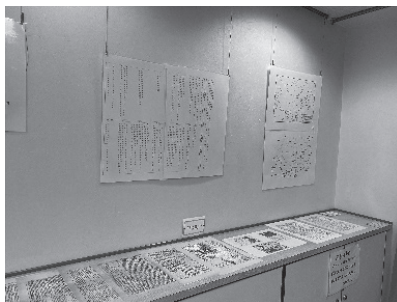
1938年5月18日、武漢を飛び立った中国軍の爆撃機が、日本の九州上空(長崎・福岡一帯)まで飛来して、反戦の宣伝ビラを散布したことをご存知でしょうか。このビラを書いたのが、日本のプロレタリア文学作家だった鹿地亘(1903年~1982年)

でした。鹿地は日中戦争(1937年~1945年/中国では「抗日戦争」と呼びます)の時代に、中国大陸において反戦活動に従事しました。1939年には、「在華日本人民反戦同盟」を結成しています。鹿地は「日本人の自立した立場」を主張して、日本人の捕虜や居留民に対して説得・教育活動を進め、その活動を通じて彼らを組織し、日本の中国大陸への侵略に反対する活動を展開していったのです。

日本と中国の間にきな臭ささえ漂う現在だからこそ、中国大陸で反戦運動を進めていた日本人が存在していたことを、日本国民や中国国民がもっと知っていく必要があるのではないかと考え、草の根からの日中友好活動の歴史的意味を考える、一つの契機とするために本展示を企画しました。

「在華日本人民反戦同盟」は重慶総部成立後に「在華日本人民反戦革命同盟」へと組織名が変更されますが、本稿では両組織とも「反戦同盟」と表記します。

展示企画では、立命館大学国際平和ミュージアム



(展示風景)



が瀬口允子さんから寄贈を受けた鹿地亘資料群から、主に1939年～1941年の間に鹿地亘が桂林および重慶で展開した「反戦同盟」による機関誌（『人民の友』『真理の闘ひ』）、宣伝に使用した資料（『言葉の弾丸』、絵ビラ、通行証等）、「反戦同盟」設立にかかわる資料およびレリーフ、印鑑、指輪等の実物資料の展示を行いました。

## 2. 鹿地亘という人物について

鹿地亘（本名／瀬口貢）は1903年5月1日、大分県西国東郡三浦村に生まれます。1924年4月、東京帝国大学文学部国文科入学、学内の社会文芸研究会、マルクス主義芸術研究会、東大新人会に参加、学外でもプロレタリア文学活動に参加しました。1928年3月、東京帝国大学文学部国文科卒業後には、「全日本無産者芸術連盟」（ナップ）に参加、中央委員を務め、1930年、小説『労働日記と靴』を発表します。1932年1月、日本共産党に入党し、その後、数度にわたり特高に逮捕され拘置所に収容されます。1934年2月、「日本無産者作家同盟」（ナップの改組後、発足）の書記長を務めていた時に「解体声明」を発表し、「作家同盟」の活動を終結させました。3月、治安維持法違反で逮捕、禁固2年、執行猶予5年の判決を受けた際に、獄中で「転向」し、1935年11月出獄しました。

1936年1月、「遠山満一座」の一員として身を隠し、神戸から中国に逃亡し、上海に到着します。2月、内山書店で魯迅と出会います（胡風が同席）。10月に魯迅は死去し、その葬儀では中国人若手作家とともに鹿地は魯迅の棺を担ぎました。1937年11月、日本軍の上海占領の中、鹿地は香港へ脱出します。1938年3月、国民政府（軍事委員会政治部第三庁長・郭沫若の提案）の招聘を受け、鹿地は香港を離れ武漢に赴きます。

これ以降の「反戦同盟」の活動については次項で紹介します。

終戦後、鹿地は1946年5月に帰国し、民主主義文学運動に参加します。1947年の第1回参議院議

員選挙の全国区に無所属で立候補しますが落選しています。1949年10月の中華人民共和国成立後に、鹿地を含む各界の著名人80余名を発起人とする「日本中国友好協会設立準備会」が発足し、1950年10月、「日本中国友好協会」が正式に成立し、鹿地は理事を務めます。1951年11月、藤沢市で結核療養中に路上で米軍諜報機関（キャノン機関）に拉致され、その後一年間、米軍に監禁されます。米国のスパイになるよう強要された「鹿地事件」は日本を揺るがす大事件になりますが、1952年12月に米軍から釈放されました。

1955年12月、「中国訪日科学代表团」で来日した郭沫若（団長）・馮乃超（事務局長）と再会し、会見します。1982年7月26日、結腸癌のため逝去、享年79歳でした。鹿地の訃報は中国の新聞メディアでも掲載されました。

## 3. 「反戦同盟」をめぐる時代背景

「反戦同盟」について述べる前に、「反戦同盟」の成立の背景となる日中関連の歴史を簡単に紹介しておきます。

日清戦争・義和団事件・日露戦争・第一次世界大戦・シベリア出兵・山東出兵・対華21カ条要求などを通して、大陸での租借地、鉄道・鉱山などの利権を得た日本は、関東府、関東軍をおきます。更に関東軍による張作霖爆殺（1928年）、柳条湖事件＝満州事変（1931年）、満州国建国（1932年）へと進み、以後、中国東北だけでなく、華北一帯へと力を及ぼしていきます。

「反戦同盟」が活動を展開した時期の中華民国は、国民党（蒋介石ら）、中国共産党（毛沢東ら）、親日派勢力（汪精衛ら）が互いにけん制し合い、勢力争いをしてきた時代でした。

以下は抗日戦争に関わる日中関連の年表です。

1935年	冀東防共自治委員会（後に自治政府）を設立。（河北省）
1936年	日本は「華北分離政策」を進め、軍を増強し、北京周辺で演習を行う。 西安事件（張学良、蒋介石を監禁、周恩来が調停）。（12月）
1937年	盧溝橋事件、日中戦争始まる。第二次国共合作成立。（7月） 国民政府、南京から重慶へ遷都。（12月） 南京空爆・上海陥落・南京占領・南京大虐殺。（8月～12月）
1938年	国民政府軍事委員会、武漢に移り政治部＜部長 陳誠、副部長 周恩来（中共）、黄祺翔（第三党）＞を設立。政治部第3庁長に郭沫若。（1月） 日本軍、5月徐州、10月広州、武漢占領。 国民政府軍事委員会、12月重慶へ移動。重慶爆撃。（～43年まで）
1939年	日本軍、海南島を占領。（2月） ドイツ軍、ポーランド侵攻（第2次世界大戦勃発）。（9月）
1940年	汪精衛、南京に傀儡政権を樹立。（3月） 国民党内の親日派勢力（何応欽ら）台頭、陳誠が転出、周恩来罷免、郭沫若罷免。（7月） 政治部文化工作委員会が成立。郭沫若が主任委員。（10月）
1941年	国民党政府、新四軍解散を命令。皖南（第四軍襲撃）事件。（1月） 国民党中央、中共各級委員の逮捕、ならびに党組織破壊の密命を下す。（3月） 米英中ソ連合戦線結成を声明。（8月） 中国政府、正式に日本に宣戦布告、独伊への戦線布告。（12月）
1942年	米英中ソ、重慶に対日戦合同参謀本部設置。（3月）
1945年	日本政府、ポツダム宣言を受諾し、無条件降伏。（8月）

#### 4. 「反戦同盟」の活動

##### (1) 「反戦同盟」に関わる略年表

以下では武漢、桂林、重慶における鹿地亘および「反戦同盟」の活動を年表形式で紹介します。前項で提示した抗日戦争年表と照らし合わせると国民政府と「反戦同盟」の関係が解りやすいと思います。

この時代、国民政府は軍事とともに政治を重視す

る立場から、国民政府軍事委員会に政治部を設置しました。政治部は蔣直系の陳誠を部長、国民党右派から張厲生を秘書長に、第三党から黄祺翔、中国共産党から周恩来を副部長としました。政治部には総務庁、第一庁から第三庁の4つの庁および設計委員会や技術委員会などが置かれ、第三庁は郭沫若を庁長におき、日本軍に対する宣伝活動を含む政治的文化的宣伝活動を担当しました。

1938年	国民政府軍事委員会政治部長陳誠、鹿地夫妻の招請を決定。「国民政府軍事委員会政治部設計委員会委員（顧問）」の辞令を受け、香港から武漢に入る。（3月） 「抗敵文芸家協会発会式」で講演。（3月） 日本国内向けのラジオ放送で演説。（4月） 蒋介石の命により、日本空襲用ビラを作成。中国軍機による九州上空（長崎、福岡一帯）へのビラ散布。（5月） 第三庁の要請で、捕虜の石田逸夫と面会、大きな転機となる。（5月） 郭沫若の依頼で、「日本兵士に告げる書」を代筆。（9月） 武漢撤退の途上、常德の捕虜収容所（平和村）を視察。鹿地亘は桂林へ。（10月）
1939年	「日本人民反戦同盟組織計画案」を蒋介石に提出。（1月） * 捕虜収容所での捕虜との懇談をふまえ、「反戦同盟」は捕虜を教育して反戦運動を組織しようとする、日本人による組織として構想された。 ルポルタージュ『平和村記』、『救亡日報』への連載。（1月） 「日本語宣伝訓練班」の設立準備に向けて、馮乃超とともに活動。（2月） 「俘虜工作に関する建議」発表。（4月）

	「反戦同盟」計画が蒋介石により正式に批准。(5月)
	「在華日本人民反戦同盟準備会」(重慶「博愛村」)成立(27名)。(10月)
	「在華日本人民反戦同盟」西南支部設立準備会(桂林の南崗廟)(11名)。(11月)
	『人民の友』創刊。(12月10日)
	「反戦同盟」西南支部成立。(12月23日)
	「反戦同盟」西南支部前線工作隊を組織し広西省南部の崑崙関前線工作に向けて桂林を出発。(12月25日)
	西南支部前線工作隊、初めて拡声器を通じ日本人兵士に呼びかけ。(桂南前線工作)。(12月29日)
	*西南支部前線工作隊、帰還のため前線を出発(松山速夫、鮎川誠二、大山邦男3名の工作隊員、前線(上林県)で殉死)。(1940年2月2日)
1940年	各所で反戦劇『三兄弟』を上演。(3月～)
	「反戦同盟」重慶総部設立、鹿地亘を会長に(14名)。(3月29日)
	『真理の闘ひ』創刊。(4月)
	「在華日本人民反戦革命同盟」総部設立(鹿地、池田の他総部17名、支部15名)。(7月20日)
	政治部の改組=郭沫若らの第三庁を撤廃。(9月)
	鹿地亘は陳誠を頼って、総部前線工作隊を編成し、湖北省恩施に移る。(9月)
	西南支部も広東方面前線へ。(9月)
	西南支部前線工作隊、前線放送開始。(10月)
	『言葉の弾丸』を刊行。(11月)
	総部前線工作隊は宜昌前線に出動。拡声器、メガホン等をもって、日本軍陣地に近接し、ついに火線の交戦に成功。蒋介石、陳誠、張治中より感電を受け、その消息は激動的波紋を各地にひろげる。(12月)
	対敵ラジオ放送など前線工作を行う。(12月)
1941年	西南支部第2回工作隊帰桂。(1月)
	前線工作から重慶に凱旋し、2万の市民の熱狂的歓迎を受ける。(1月)
	博愛村収容所長鄒任之より「反戦同盟」改編プラン出される。(3月)
	「反戦同盟」総部の8名のメンバーの逃亡事件。(3月)
	国民政府軍事委員会政治部より、「反戦同盟」解散を命じられる。(8月)
	*重慶、桂林の全同盟員が鹿地亘、池田幸子よりひきはなされ、貴州鎮遠の第二収容所に送還。同盟は収容所内において「平和村訓練班」としての活動に入る。
	*政治部が重慶に「軍事委員会政治部鹿地研究室」の設置を決定。鹿地亘が室長に就任。その他池田幸子と他2名が所属メンバー。
1942年	鎮遠平和村の同盟員6名がイギリス政府の要請(シンガポール工作)を受け重慶に赴く。(1月)(3月のシンガポール陥落後、工作隊派遣中止)
	新来者によって和平村新生班結成(70名余)。(4月)
	鹿地亘、米軍参謀との接触。(秋以降)
1943年	鹿地亘、遠征司令長官(陳誠)司令部顧問に就任。(3月)
	同盟員3名(岸本、山川、沢村)「和平村」を出て、鹿地研究室に加わる。(12月)
1944年	米軍のOSS(Office of Strategic Service/戦略情報部)MO(Moral Operation/心理作戦部)より、鹿地亘に協力要請。(春頃)
	鹿地亘、重慶米大使館内のOWI(Office of War Information/戦時情報局)日本字新聞の編集の顧問就任。(10月)
	鎮遠の平和村の379名の捕虜が四川省巴県鹿角郷に移送される。(12月)
	平和村「訓練班」「新生班」「研究班」解散、「和平村教育隊(1945年5月に「日本民主革命工作隊」に改称)」結成。(12月)
1945年	日本無条件降伏、ポツダム宣言受諾。(8月15日)
1946年	鹿地亘夫妻ら、重慶を離れ、空路上海へ。博多港に帰国。(5月7日)

## (2) 「反戦同盟」の活動

年表に示している「反戦同盟」の主な活動としては、機関誌の発行、前線工作が挙げられます。その他の活動としては学習と体力づくりが挙げられます。今回の展示では、これらの機関誌や前線工作で用い

られた実物資料のレプリカの展示を行いました。

まず機関誌の発行ですが、主なものは以下のとおりです。機関誌は同盟員の学習教材であり、また「反戦同盟」の活動を同盟員以外の人々に伝える媒体でもありました。



- ・『人民の友』（1939年12月10日～1941年6月1日〈29号〉）「在華日本人民反戦同盟」西南支部、後に「在華日本人民反戦革命同盟」桂林分会発行の機関誌。半月刊、タブロイド判、これが最初の「反戦同盟」の刊行物。
- ・『真理の闘ひ』（1940年4月15日～1941年7月1日〈18号〉）「在華日本人民反戦同盟」、後に「在華日本人民反戦革命同盟」の機関誌。真理の闘ひ社（重慶）発行。
- ・『使命』（1941年1月創刊）和平村「研究班」
- ・『鹿地研究室報』（1941年11月～1944年10月〈18期〉）
- ・『呼聲』（1942年1月20日～1942年5月1日〈4号〉）和平村「訓練班」（鎮遠）の機関誌。1941年8月、国民政府によって解散を命じられた「反戦同盟」は貴州省鎮遠の軍政部第二俘虜收容所（和平村）に收容された時に、組織を和平村訓練班と改称した。
- ・『和平先鋒』『東亞先鋒』（1943年～1944年）和平村「新生活協会（訓練班、新生班による）」による統一機関紙。和平村訓練班は、新たに收容された日本軍捕虜を加えて新生活協会を組織し、收容所当局の同意を得て、東亜先鋒社を設け、捕虜に対する宣伝活動を行った。『和平先鋒』は『東亞先鋒』の改題されたもの。次に、前線工作についてですが、これは国民党軍と共に日本軍の戦場に赴き、日本軍の至近距離まで近づき拡声器を用いて反戦を訴え、矢文を飛ばしてビラ散布を行うという活動をしていました。その時の呼びかけの言葉が展示のテーマである「おーい！日本兵士諸君聞こえるか！」です。呼びかけの内容は、「国際情勢」「(日本)国内状況」「中日戦争と日本人民」「戦場に於ける兵士の要求」「替え歌」等と多様で、『対兵士宣伝のスローガン』（1940年10月）や『言葉の弾丸』（宜昌前線において「反戦同盟」火線工作隊が作成・使用した拡声器放送テキスト、1940年11月）としてまとめられ、前線工作で活用されていました。投降をよびかけるカラー印刷の「絵ビラ」、「通行証」やパンフレットも作成されました。これらは郭沫若らの軍事委員会政治部の

印刷所で印刷されました。

## 5. 抗日戦争時代の鹿地亘をめぐる人々

鹿地亘が中国で「反戦同盟」の活動を展開した背景には鹿地亘の周辺の中国人の存在があります。日本人民への友好の思いから鹿地亘を支えた人々、抗日戦争の手段として「反戦同盟」を利用した人々と様々です。また、「反戦同盟」解散後にはアメリカ人との交流が始まります。「反戦同盟」に関わる資料群を中国から日本に届けたのはアメリカ人のフェアバンク博士でした。

以下に抗日戦争時代の鹿地亘をめぐる人々について紹介します。

＜「反戦同盟」の友人たち＞

**呉石**（1894年～1950年）日本の陸軍大学校出身、国民党きっての兵学者と言われている。1946年5月の鹿地の帰国時は国民政府軍政府秘書長、ついで台湾の蔣政府では陸軍次長になっていたが、時勢を深く察し、民族を憂え、將軍の中でひそかに台湾の祖国復帰の計画をすすめ、それが発覚して1950年の春、蔣の凶手に名誉ある生涯をとじた。

**張治中**（1890年～1969年）中華民国の軍人、国民革命軍の將軍。第一次、第二次上海事変に従軍。抗日戦争では国民政府軍事委員会政治部部长兼三民主義青年団書記長を務める。「反戦同盟」の宣伝活動を指導。部下のファシスト軍人たちの圧力のため鹿地らを充分後援できないことに苦衷を感じていた。揚子江渡河の大作戦の前に国民党元老の邵力子とともに、蔣政権側の和平使節として北京に出向き、そのまま共和国側に加わる。

**廖濟寰**（生年、没年不明）桂林行營参謀処第一課長。日本に留学し一高、東京大学を卒業した経歴がある。広西にて鹿地の通訳を務めた際に鹿地の取り組みに共感し、呉石の下で「反戦同盟」設立に協力をし、「反戦同盟」西南支部成立後は前線工作にも参加。家族を共産党に虐殺された経緯から反共産党を貫くが、民族を憂え、日本人民との友情をもとめ、国民党の腐敗に絶望していた。

**白崇禧**（1893年～1966年） 中華民国の軍人、政治家。広西省を地盤とする軍閥（新桂林系）と呼ばれた。蒋介石とは抗日では一致したが、蒋介石の権威には挑戦し続けた。1938年、山東省・台児荘で日本軍を撃退した戦いは有名。1939年軍事委員会桂林行営主任として鹿地亘の「反戦同盟」組織計画を支援した。

<中共および文化界の人々>

**馮乃超**（1901年～1983年） 詩人、評論家。華僑の子弟として幼時から日本で学び、東大文学部社会学科に学ぶ。郭沫若、郁達夫らと共に文学同人・創造社で活躍。「革命文学」を提唱。1930年に「左翼作家連盟」に参加。1938年、国民政府軍事委員会政治部第三庁、第7課課長。郭沫若、鹿地亘と共に対敵宣伝活動を行う。解放戦争の後、華南軍代表として第一次政治協商会議に加わり、その後故郷の広東大学の学長となった。

**夏衍**（1900年～1995年） 1920年に日本留学、明治専門学校や九州帝大で学ぶ。文学の創作や批評を行い、また国民党に入党して駐日総支部組織部長として組織工作に当たる。1927年、帰国。左翼作家連盟に参加。演劇や映画運動を展開した。代表作に「賽金花」「包身工」など。1939年、桂林で『救亡日報』を復刊。第二次上海事変後、香港に潜伏していた鹿地を「国民政府軍事委員会政治部」の「設計顧問」とすることに尽力した。桂林の樂群社などで鹿地亘と文化活動を行った。

**康大川**（1915年～2004年） 本名は康天順。台湾出身。編集、翻訳活動で活躍、1952年『人民中国』編集長。1938年早稲田大学卒業後、抗日戦争に参加。国民政府軍事委員会政治部第三庁で郭沫若の指導の下、主として鎮遠において対敵宣伝や俘虜の管理、教育に携わる。鹿地亘の活動にも協力、理解者であった。「反戦同盟」のために国民党特務警察の手にかかり、あやうく闇に葬られかけ、3年に近い獄中生活の後、1945年の双十協定で再び自由を得たが、解放戦争に際しては南京附近の遊撃部隊に加わり、山中の拠点に加わって戦った。

**郭沫若**（1892年～1978年） 小説家、詩人、歴史学者。日本に留学、六高、九大で学ぶ。文学雑誌

『創造者』同人。抗戦中は国民政府軍事委員会第三庁長として宣伝仕事を担当。鹿地亘を招聘し、活動を支援。

<「反戦同盟」の敵対者の側の人々>

**鄒任之**（1911年～1973年） 1933年に日本に留学し、1936年帰国後、国民政府軍事委員会に勤務。1938年から1945年まで常德や重慶の軍政部第二俘虜收容所（和平村、博愛村）所長を務める。国民政府における自らの保身のために「反戦同盟」を利用し、捕虜を食い物にした。

**王芃生**（1893年～1946年） 芃生は字、本名は王大楨。中華民国の外交官、政治家。東京帝国大学経済学部で学ぶ。1926年、北伐革命に参加。1937年、国民政府軍事委員会国際問題研究所を主宰。

**青山和夫**（1907年～1997年） 戦前、戦中の共産主義者、政治運動家。1934年に検挙、翌年、転向文書に署名して出獄。上海に渡る。日中戦争勃発後、王芃生の国際問題研究所に顧問として招聘される。鹿地亘とは「反戦同盟」の主導権をめぐる対立関係にあった。鎮遠の和平村「研究班」を組織した。

<主要な人物>

**周恩来**（1898年～1976年） 中華人民共和国の政治家、國務院総理（首相）。抗日戦争中は重慶を中心に国民政府軍事委員会政治部副部長として国民党との統一戦線工作に従事。

**蒋介石**（1887年～1975年） 中華民国の政治家、軍人。1937年盧溝橋事件を契機に日中全面戦争勃発時に蔣は共産党との国共合作に踏みきる。武漢で国民政府軍事委員会を設置。腹心の陳誠を部長に、周恩来を副部長に任命。

**陳誠**（1897年～1965年） 中華民国の政治家、軍人。国民革命軍一級上將。第二次国共合作後に新設された政治部の部長として張勵生ら国民党右派と共に郭沫若、馮乃超、田漢ら左派系芸術家を起用してプロパガンダ戦略を展開した。

**胡風**（1902年～1985年） 文芸理論家、詩人。北京大学や清華大学に学んだ1920年代に新文学、革命思想の洗礼をうける。1931年に日本に留学し、日本のプロレタリア文学運動に参加。1933年に連

捕されて強制送還。上海で魯迅の信頼を得て共に文学運動に参加する。鹿地亘ともプロレタリア文学を通じて深い交流があった。

**魯迅**（1881年～1936年）近代中国を代表する作家、思想家。1902年、日本留学、仙台医学専門学校に学ぶ。代表作『狂人日記』『阿Q正伝』『呐喊』『野草』など。1930年3月、中国左翼作家連盟の結成に参加。上海の租界に在って文学による時代批評や文学論争を展開する。傍ら内山書店を舞台に日本の文化人と交流。晩年、鹿地亘とも親交があった。

<米国関係者>

**フェアバンク**（1907年～1991年）ジョン・K・フェアバンク。アメリカの歴史学者、中国学者。1932年、北京に渡り清華大学で学び、その後、オックスフォード大学にも留学。1941年、太平洋戦争勃発とともに戦時情報局（OWI）などの仕事で、重慶に派遣される。1946年4月、鹿地亘の要請に応じて「反戦同盟」に関する資料を日本に輸送する。現在の、立命館大学国際平和ミュージアム所蔵「鹿地亘氏関係資料」である。

**エマーソン**（1908年～1984年）ジョン・エマーソン。米国の外交官、駐日米国公使。1935年、駐日大使館語学担当官として着任、副領事を兼任。日本現代史、政治学を専門とする。1943年、重慶米国大使館に戦時情報局（OWI）が設置され、エマーソンは米国務省秘書官として鹿地と親交を結んだ。

## 6. 展示を終えて

今回の展示では、1939年12月の「在華日本人民反戦同盟」西南支部の成立から1941年8月の「在華日本人民反戦革命同盟」解散までの「反戦同盟」の活動の紹介を行いました。

今回の展示では、中国において抗日戦争・日中戦争期になぜ中国国民政府が日本人による反戦運動を支援したのか、中国の日本人俘虜政策の実態はどうかであったのか、日本人による反戦運動は日中戦争の進展にどのような影響を与えたのかについては触れ

ていません。また、鹿地亘自身の著作および鹿地亘資料群を元に展示を構成したため、中国国民政府側の資料や「反戦同盟」西南支部と重慶総部以外の日本人による「反戦」活動への言及もしていません。「反戦同盟」解散後、鹿地亘は国民政府と米国の機関（OWIやOSS）との関係の中で活動を進めますが、この時期への言及もしていません。

今後、機会があれば、中国での日本人による「反戦」活動の総合的な研究を基盤に、改めて立命館大学国際平和ミュージアムの鹿地亘関係資料を活用した展示に取り組みたいと考えています。

附：展示で使用した立命館大学国際平和ミュージアム収蔵資料一覧

資料番号	説明
1	0030519 写真：重慶両路口大田湾自宅ベランダにて。
2	0030522 写真：整理する日本人民反戦同盟西南支部員。
3	0037539 写真：重慶市民の歓迎にこたえてトラック上で挨拶する鹿地亘の写真。
4	9002233 聘書：鹿地亘の本部設計委員会委員の聘。
5	9002236 聘書：鹿地亘の本部設計委員会名誉委員の聘。
6	9002241 電報：鹿地研究室成立の通知。
7	9002275 反戦同盟解散について
8	9002292 人民の友 2
9	9002313 人民の友第29期
10	9002314 真理の闘ひ No.1
11	9002320 真理の闘ひ No.7
12	9002331 真理の闘ひ No.18
13	9002438 無能政府と軍部を打ち倒せ！
14	9002605 言葉之弾丸
15	9002633 在華日本人民反戦革命同盟成立大会宣言
16	9002650 俘虜工作に関する建議（原稿）
17	9002424 絵ビラ
18	9002446 絵ビラ
19	9003062 ビラ
20	9003204 ビラ
21	9002425 通行証
22	9002427 通行証
23	9002428 通行証
24	9000521 鹿地亘レリーフ
25	9000503 印章
26	9000504 指輪

※ No.1～23 はレプリカを作成、展示。

※ No.24～26 は実物資料を展示。

## 【参考文献】

『日本人民反戦同盟資料集』別巻、不二出版、1995年。

鹿地亘『日本兵士の反戦運動』、同成社、1982年。

鹿地亘『回想記「抗日戦争」のなかで』、新日本出版社、1982年。

鹿地亘『火の如く風の如く』、講談社、1958年。

鹿地亘編『反戦資料』、同成社、1964年。

井上桂子『中国で反戦平和活動をした日本人』、八千代出版、2012年。

篠田裕介「立命館大学国際平和ミュージアム鹿地亘関係資料に於ける軍事委員会政治部第三庁の対日伝単について」、『立命館平和研究』第18号、2017年。